銀狼王女
Werewolf Princess

みかづき紅月
illustration ◎フミオ

美少女文庫
FRANCE SHOIN

周囲に再び静けさが甦る。

「い、今のって。き、き、君は――」

気がつけば、銀髪の少女が和樹を押し倒している格好になっていた。

和樹は、胸のあたりに押しつけられたやんわりとした少女の膨らみが気になって仕方ない。心臓が狂ったように脈打ち、股間に血が集まるのを感じて焦ってしまう。女の子とまるで縁がなかった和樹にとっては、うれしくも悩ましい状況下にあった。

さらには、間近で見た彼女の顔は、ため息をもらしてしまうほど美しかった。

抜けるように白い肌は陶器のようで、頬だけがほんのりと薔薇色に染まっている。同じく淡いピンク色に色づいた薄い唇からは白い息が間断なく吐きだされている。その息使いさえすぐ傍に感じられるほど、間近に彼女の端整な顔が寄せられていた。大きな瞳を縁取る睫毛は、瞬きをするたびに音がしそうなほどに長い。

なによりも、その瞳は世にも珍しい真紅の色をしており、燃え盛る炎のように見え、和樹はうっとりと見入ってしまう。一分の隙すらないほどの完璧な美しさは、ともすれば見る者に冷たい印象すら与えてしまう。目の前の彼女は、まさにそんな美しさを湛えていた。この世ならぬ美しさとでもいう表現がぴったりだった。

笑えばさぞ可愛いに違いない。

だが、彼女は世にも険悪な半目になって和樹を睨みつけた。せっかくの美貌が台なしである。

「で、きさま。さっきのはどういうつもりだ？　なぜ、わらわの邪魔をした。このわらわが、魔王女、亞里亞と知っての狼藉か？　よっぽど命が惜しくないと見える」

「じゃ、邪魔って。そんなつもりじゃ……」

「ならば、どういうつもりだ！」

怒りに瞳を燃やした彼女が、和樹にメンチを切る。

少し頭を起こせば、キスできそうな距離に和樹はあわててしまう。

「だ、だって、あのままだと背中を斬られるんじゃないかって……」

「それがどうした？　あの一撃では、到底致命傷にはなり得ぬ。肉を切らせて骨を断つという言葉を知らぬのか？」

「に、肉なんて切らせないほうがいいって。そんなにキレイなのに傷がついたらもったいないっていうか……」

「なにっ⁉」

亞里亞は、和樹の言葉を耳にした途端、くわっと牙を剝く。

「き、きさまっ、わらわは魔王女ぞっ⁉　傷なんてすぐに治るっ！」

怒りのせいだろうか、頬の朱が先ほどよりも濃くなっているように見える。途端、先ほどまでの人を寄せつけない冷たい美貌が和らいだ。

「まおうじょがなんだかわからないけど……」

なにがそんなにも彼女を怒らせているかさっぱりわからない和樹は、ただただおろおろとどもってしまうのみ。

「魔王女と言ったら、読んで字のごとく魔族を統べる魔界の王女だ！」

「ていったって、女の子には変わりないし。傷がついたら、その困るだろうし……」

「わ、わらわが女の子ぉ!?　きさまごときのようなこわっぱにそんなことを言われる筋合いなぞないわっ！」

そんな和樹に剝き出しの細い肩をいからせ銀色の髪を逆立てる亞里亞。

途端、髪のなかからぴんっと銀色の毛で覆われた犬の耳が立った。

見間違いかと和樹は思ったが、明らかにそれは犬の耳だった。

（嘘だろ？　この子、いったい何者なんだ!?　魔界の王女とか言ってるけど、犬娘？）

もしやと思って視線を彼女のヒップあたりに向けると、彼の予想を裏切らず、スカートの下から立派な銀色の尻尾がのぞいていた。人間じゃないことは確かなようだ。

だけど、耳と尻尾が生えている他は、ごくごく普通の女の子に他ならなくて。

いや、むしろ彼が今まで見てきたどんな女の子よりも美しくてミステリアスで。

亞里亞が憤って、顔を近づけるほどむにゅりと押しつけられる胸の肉の弾力が気になって仕方ない。ズボンの下で、すでに股間は雄々しく育ちきってしまっていた。

少女自身から立ち昇る甘い芳香に目眩を覚える。彼女の怒りの声がはるか遠くへと遠のく。痛いくらいに漲った半身が、今すぐ彼女を押し倒して襲ってしまえと囁く。

初めての衝動だった。まさか、自分のなかにこんな獰猛な感情が潜んでいたなんて和樹は思ってもみなかった。

（ヤバい。我慢できなくなって……）

頭がぼうっと熱で浮かされたようになってしまい、和樹は彼女の胸が密着した隙間に手を差し入れてみた。

（……や、柔らかい）

指に触れるむにむにの感触に体温が一気に急上昇する。

牡の獰猛な気持ちはさらに膨れあがり、いっそう彼を駆りたてる。もっともっと大胆に柔らかな胸を味わいたいという気持ちが彼を支配しつつあった。

「む、な、なにをっ!?」

胸のあたりに異変を感じた亞里亞が、上半身を起こす。

と、必然的に形のよいまろやかな乳房が和樹の手のひらにすっぽりと収まる格好になってしまう。

亞里亞は、身体を起こしたまま、目を見開き硬直してしまう。和樹の指が自らの白い乳房に食いこんでいる様子を凝視するも、いったい、今自分がなにをされているか理解が追いついていないようだった。

それをいいことに、和樹は両手いっぱいにはちきれんばかりの乳房の重みを感じながら無我夢中になって揉みしだいていた。力の加減に気を配る余裕すらない。

（手のひらになんかしこりが……。乳首、勃ってるんだ!?　気持ちよくなってる?）

エロ雑誌やエロ漫画で得た知識を総動員させて、一人で勝手に興奮してしまう。

だが、いつまで経っても亞里亞の唇からは甘い声はもれてこない。

そこで、はっと我にかえった和樹が、手をとめ、改めて彼女を見た。

「……」

確かに彼女は目もとを朱色に染めてはいた。

が、それと同時に怒ったような困ったような複雑な表情を浮かべて震えていた。

そんな彼女を目にした途端、たちまち罪悪感が和樹の胸に芽生える。

昂っていた気持ちが急速にしぼんでゆく。

「……ご、ごめん」
名残惜しい気持ちはあったが、量感たっぷりの乳房からあわてて手を離そうとする。
が、そのときだった。
亞里亞が、くわっと口を開くと、和樹の手に思いきり噛みついたからたまらない。
「ぐわぁあああああああああああっ！」
情けない悲鳴をあげ、必死に手を振って、亞里亞の口を手からはずそうとする。
だが、亞里亞は意地でも噛みついた手を離そうとしない。和樹の手の動きに合わせて、彼女の形のよい顎が揺れ、豊かなシルバーブロンドが闇にたゆたう。
「がうぅうう……」
耳を立て、髪を逆立てて小さく唸る彼女は、怒った犬そのものだった。
「いたっ、痛いっ。ご、ごめん。ごめんっ！　ホントに悪かった！　つい気になって。今は反省してるからっ。ゆ、許してっ」
和樹は、涙目になって許しを乞うも、亞里亞は牙を緩めようとしない。
だが――
ぐきゅるるるるるる。
なんともマヌケな音があたりに響いた途端、彼女は顔を赤らめて、和樹の手からよ

うやく牙をはずした。
「いて、てててて……」
和樹が彼女に噛まれていた箇所を確認すると、大層立派な歯型がついていた。犬歯に当たるところはうっすら血が滲んですらいる。当然、ずきずきと痛む。
和樹は必死になって手をさする。
「本気でかぶりついたね……。親にもかぶりつかれたことなんてないのに」
そんな彼の恨みがましい目線を冷たくあしらうと、亞里亞は勢いよくそっぽを向いて腕組みをする。
「ふんっ。自業自得であろう！」
えらそうに胸を張ってみせるも、またお腹が情けない悲鳴をあげてしまい、あわてて彼女はお腹を押さえた。
「なんだ。腹減ってるのか？」
「うるさいっ！　高貴な魔王女たるもの、そ、そんなひもじい思いなどしておらぬ！まったく今日はなんという厄日だ。下賤の民に辱しめを受けるわ、醜態をさらしてしまうわ……。魔王女の名がすたるっ」
ぶつぶつ言いながら、耳まで真っ赤になってその場にうずくまって耳を伏せる。